

女性スポーツの日本の現状と課題

組織、指導者環境状況から

女性活躍推進法が制定されている中、スポーツ界による指導者(コーチ)、組織役員の意思決定者が少数である。

世界女性スポーツ会議の決議分の定め

2000年 10パーセント

2014年 40パーセント

現状日本は10パーセント。2020年五輪東京大会までに、世界基準40パーセントに対し、日本は30パーセント達成目標を掲げている現状。

日本全般の課題同様。

身体、生理的課題の現状から

女性アスリート(一般選手含む)外来の設置

婦人科、整形外科、栄養、等女性選手に特化した総合治療、カウンセリングの外来を各都道府県に設置。

女性アスリート(一般選手含む)の必須

女性の三大スポーツ障害 鉄欠乏性貧血 疲労骨折 靭帯損傷

現象は、トップアスリートに多く起こると思われるがちですが、発症のピークは16歳と身体の変動があるユース年代なのです。

フェリチン値検査(保険適用外)肝臓に蓄えられた鉄分の値。一般的には検査されていない。低下から正常化するのに3か月～6か月かかり、パフォーマンスも健康な活動も低下する。鉄分摂取は、吸収力は十分の一で食物摂取が難しい現状でもある。

LEP(低用量ピル)の啓蒙

欧米アスリートは、大半の女性が活用されているが、日本においては認知不足と、啓蒙活動が少なく活用されていない。

月経の痛み等不安な状況と、厳しい環境での活動が、多種競技において年齢層幅広く困惑しているため、現状の改善を図りたい

佐々木則夫